「ＩＣＴが日常になる」ための１０の仕掛け

－“普通の学校”が島根県を牽引する学校の一つになるまでの軌跡－

石橋邦彦（江津市立高角小学校　前美郷町立邑智小学校長）

概要：　平成２７年９月，島根県美郷町の小中学校（小学校２校，中学校２校）では，ＩＣＴの効果的な活用を目指し，教育委員会主導で，小学４年生から中学３年生までの全児童生徒及び教員に，１人１台の iPad が貸与された。（以降３年生，２年生，１年生へと拡充）それに伴い，ＩＣＴ環境の整備やＩＣＴ支援員の配置等様々な取組がなされている。ＩＣＴ教育に関する実績があるわけでも，ＩＣＴ機器やＩＣＴ教育に精通している教員がいるわけでもない，いわゆる“普通の学校”の邑智小学校が，「ＩＣＴが日常になる」を合言葉に試行錯誤を重ね，島根県のＩＣＴ教育を牽引する学校の一つまでになった軌跡を発表する。

キーワード：登るべき山を示し一歩前を照らす，自主公開授業研究会，使わなければ使えない

１　はじめに

島根県美郷町の小中学校（小学校２校，中学校２校）では，平成２７年９月に４年生以上１人１台の iPad が貸与された。（２９年度は小学３年生に，３０年度は小学２年生に，３１年度は小学１年生へと順次拡充予定）それに併せ，ＩＣＴ支援員が週１日の割合で各校に配属された。さらには，教育委員会主導でＩＣＴ環境の整備が進められ，各学校でＩＣＴの効果的な活用を目指した取組が始まった。

邑智小学校は，ＩＣＴ教育に関する実績があるわけでも，ＩＣＴ機器やＩＣＴ教育に精通している教員がいるわけでもない，いわゆる“普通の学校”であった。環境面の整備が先行する中で効果を上げるために，試行錯誤の連続であった。しかし，手探りではなかなか前に進まないので，「ＩＣＴが日常になる」を目標に，校長主導で登山に例えた「１０の仕掛け」を示し，全校で取り組むことにした。当初はＩＣＴ教育に少し距離を置いていた教員も，次第に授業の中で活用するようになり，児童にも変化が現れてきた。そして，その効果が実感きるようになり，今ではＩＣＴはなくてはならない道具になった。

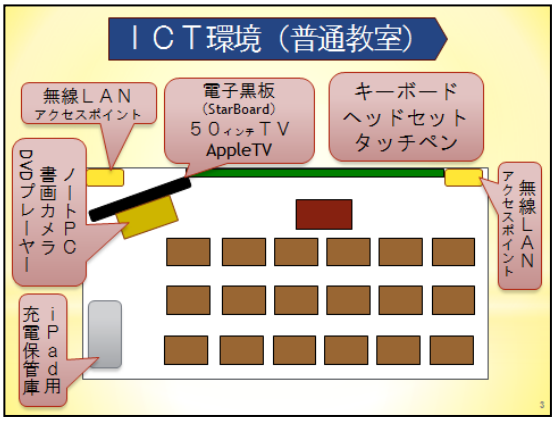

図１　邑智小学校のＩＣＴ環境

２　研究の方法

（１）１０の仕掛けの提示

新たなことに取り組む時，足元だけを見ていたら袋小路に迷い込む。一方，かけ声だけでは前に進まない。そこで，「登るべき山（目的と目標）を示し，一歩前（手順と方法）を照らす」ことで教員がＩＣＴ教育に取り組みやすくするために，「１０の仕掛け」を示すことにした。

（２）自主公開授業研究会の実施

自分たちの取組が良いのか悪いのかを確認しながら前に進むために，学期に１回ずつ（３年間），他校からの参加者を募りながら授業を公開し，自主的な研究会を実施した。

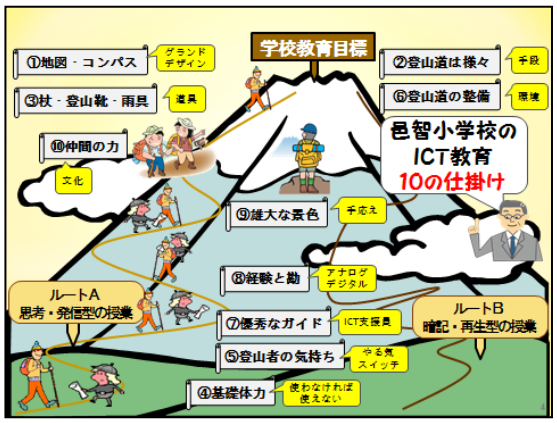

図２　邑智小学校の「１０の仕掛け」

３　実際の取組

① 地図・コンパス：グランドデザイン

地図やコンパスがなければ，どこに進んでいいのかわからない。そこで，本校におけるＩＣＴ教育の目的と目標を明確にし，授業のどこで活用するのか，中学校との系統性はどう考えるのか等が分かりやすいグランドデザインを作成した。また，小学１年生から中学３年生まで系統的にＩＣＴ教育に取り組めるように，中学校と協力して「ＩＣＴ教育系統表」も作成した。

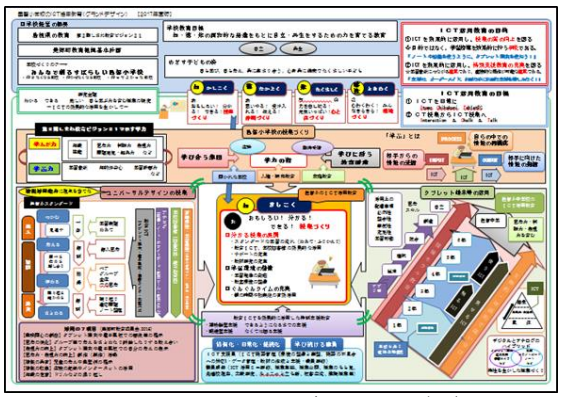

図３　ＩＣＴ教育のグランドデザイン

＜ＩＣＴ教育の目的＞

●ＩＣＴを効果的に活用し，授業の質の向上を図る。

☆ノートや鉛筆を使うように，タブレット端末を使おう！

●ＩＣＴを効果的に活用し，特別支援教育の充実を図る。

☆支援は，オーダーメイド。必要な子に必要な支援を惜しみなく！

＜ＩＣＴ教育の目標＞

●ＩＣＴを日常に

I　いつも　**C**　ちかくに　**T**　タブレット

●ＣＴ授業からＩＣＴ授業へ

I　インタラクション　＆

C　チョーク　＆　**T**　トーク

② 登山道は様々：あくまで手段

学校教育目標の具現化への道は様々ある。思考を柔軟にするためにも，教員のやる気を高めるためにも，校内の取組をＩＣＴ教育に限定しすぎないようにした。

③ 杖・登山靴・雨具：道具

④ 基礎体力：使わなければ使えない

ＩＣＴ教育が浸透していくためには，教員も児童もＩＣＴ機器への抵抗を減らし積極的に使えるようにならなければならない。美郷町の教育長は常々「タブレット PC は消耗品。どんどん使わせるように。」と言っておられる。児童が壊すのではないかと心配して使うのをためらえば，決して使えるようにはならない。そこで，児童にタブレット PC 貸与へ込められた思いを伝えるとともに，使用上のルールを明確にして積極的に使わせるようにした。次第に児童同士でも教え合うようになり，上手に使うようになった。

また，教員自身もどんどんと使わなければＩＣＴ機器を上手に活用することはできない。そこで，教育委員会と連携して機器の充実を図るとともに，校内ミニ研修会等使い方の研修を繰り返し行った。職員室に教室同様のＩＣＴ機器を整備していつでも使えるようにしたり，職員会議の資料を大型テレビに映し出したりと，教員自身がその効果を実感できるとともに，使わなければならないような状況をつくった。

写真１　職員会議での積極的な活用

⑤ 登山者の気持ち：やる気スイッチ

授業で活用するようになるためには，教員自身が使おうという気持ちをまずはもたなければならない。そこで，先進校の取組を校長室だより等で紹介したり，教員が先進校の授業を見る機会を増やしたりしながら，ＩＣＴ教育に取り組もうという気持ちを高めるようにした。また，学期に１回ずつ自主授業公開研究会を企画し，県メディア教育研究会等から講師を招いて指導を受けながら互いに高め合う機会を増やした。

⑥ 登山道の整備：ＩＣＴ環境

ＩＣＴは「いつもちょっとトラブル」と揶揄されるように，ＩＣＴ機器を使おうとすると，いろいろなトラブルが発生する。その積み重ねが教員の意欲を減退させることにつながるので，教育委員会と連携してＩＣＴ環境の整備をしたり，トラブルの解消に努めたりした。

⑦ 優秀なガイド：ＩＣＴ支援員

美郷町では，当初１人のＩＣＴ支援員が町内４校を巡回し，教員の相談にのったり，研修を進めたりできるような体制が組まれた。2016年度からは２人体制になり，支援が充実してきた。（今後は１校１人体制に拡充予定）

授業に参加しトラブルをすぐに解消したり，様々な活用方法を紹介したりしてくれるＩＣＴ支援員の力は絶大である。初めはぴったりと寄り添って支援していたが，教員の実態に合わせて，横につき，後ろにつき，最後は見守るという絶妙の距離感が教員の力量を高め，次第に独りでも活用できるまでになった。

写真２　職員室でＩＣＴ支援員と相談

⑧ 経験と勘：アナログとデジタル

授業において，デジタルは万能ではない。板書やノート指導などのアナログの効果や重要性に常に立ち返りながら授業を進めるようにした。

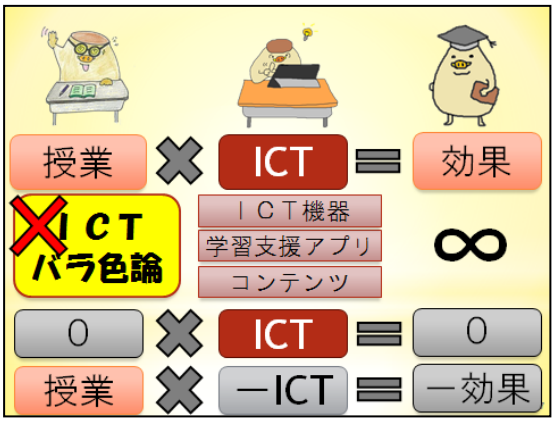

図４　授業とＩＣＴ

写真３　アナログもデジタルも

⑨ 雄大な景色：手応え

⑩ 仲間の力：職員室の文化

授業の様子を見て回り，効果的な使い方をしている場面を評価したり，他の教室に紹介したりしながら小さな手応えを感じられるようにすることで学校全体で取り組む文化を醸成した。

図５　邑智スタンダード

また，これまでの考えや活用方法を「邑智スタンダード」にまとめ，いつでも見られるようにした。

４　結果と考察

写真４　デジタル教科書を使った授業

写真５　schoolTakt を使った算数の授業

写真６　Skype を使った外部との交流授業

４年生以上に１人１台の iPad が貸与されて以来，「１０の仕掛け」を中心に取り組んできた結果，児童は「ノートや鉛筆を使うように，タブレットＰＣを使う」ようになり，教員は「分かりやすく教えるためにタブレットＰＣを使いこなす」ようになった。また，特別支援教育の充実においても，「支援は，オーダーメイド。必要な子に必要な支援を惜しみなく！」が実現してきた。今ではタブレットＰＣを始めとするＩＣＴ機器は，邑智小学校の教員にも児童にもなくてはならない道具となった。各教室では授業中だけでなく朝の会や帰りの会，給食指導や児童会活動時など一日中活用するようになっており，教員の意識も大きく変わった。他市町から転任してきた教員も，周りの支援と学校文化によりあっという間に使いこなせるようになるなど，まさに「ＩＣＴが日常になった」のである。

児童の卒業時には，美郷町の大ホールで自分の夢を紹介したり，町の未来像を発表したりと，児童もより高いレベルで自分の考えを表現するようになった。

写真７　卒業時の発表

邑智小学校のように”普通の学校“がＩＣＴ教育を充実させていくには，やみくもにやっても成果は上がらない。児童や教員の実態を見極め，しっかりとした方向を見定め，丁寧に取り組んできたことが，ＩＣＴ教育を推進する教員を養成することにつながった。また，教員も児童も手応えを感じることで，さらによりよいものを目指すという好循環が起こり，島根県を牽引する学校の一つになっていったのである。

５　今後の課題

ＩＣＴ教育の充実は，喫緊の課題である。しかしすべての学校が，美郷町のような充実した支援が受けられるわけではない。現在あるもの，現在ある支援を見極め，「１０の仕掛け」に照らし，全方位で取組を充実させていくかが今後の課題である。

参考文献

赤堀侃司(2014)タブレットは紙に勝てるのか.
　　ジャムハウス，東京

タブレット端末活用実践事例集 2016(2016)
　　Sky 株式会社，大阪